

「監督さん」と呼ばれて

岡田 良子（1996年度修了 鹿島建設(株) 中部支店）

修士1年生の3月頃のことです。就職活動を始めるにあたり、自分は何をしたいのか初めて真剣に考えました。家には、リクルート雑誌が送られてきていましたが、当時は、バブルがはじけ、就職難といわれていた時代で、女子学生の元へくるリクルート雑誌の数は、同級生の男の子たちに比べ、極端に少ないものでした。そんな時代であったにも関わらず、考えた末に、わたしがやりたい、と思った仕事は、“現場監督”でした。目の前で、建物ができていく様を見たい、創り上げて行きたい、と思ったのでした。

いざ、就職活動を始め、数社のゼネコン宛に資料請求のはがきを送りました。しかし、わたしの元へは、ひとつの会社からも資料が送られてくることはありませんでした。現場監督を希望するような女子学生は、いらなかったのでしょうか。ゼネコンへの学校推薦枠をもらい、受験することになったときも、（まず、受からないだろう）と言われていました。しかし、わたしの強い想いが通じたのか、女監督も面白いかなと思ってくれたのか、幸いにも、採用となり、現場監督の道を歩むことになりました。

会社に入り、実際に現場へ出てみると、先輩監督たちと職人さんたちとで話している専門用語の意味がまったく分からず、何を言っているのか、さっぱり分かりませんでした。そんなド素人の新米監督にも、職人さんたちは、「監督さん。」と声をかけてきてくれます。そして、容赦なく、わたしの分からない専門用語で、質問をしてくる。最初は、笑顔でかわしていましたが、いつまでも、それが通用するほど甘くありません。「分かりません」と言えば、職人さんたちからなめられます。「確認してきます」と返事をし、工事事務所にダッシュで戻り、必死で調べ、職人さんの元へ戻り、知った風な感じで返答していました。

新人時代は、（なんで、こんなことをやらなきゃならないんだろう）と思うような仕事もたくさんありました。そんなとき、ある研修で、何百億という大規模現場の現場所長の話聞く機会がありました。「若い頃は、無駄だと思える仕事がたくさんありますが、無駄な仕事などひとつもなく、どんな仕事でも、必ず、自分の力になります。」と話されました。実際、その所長も、若い頃は、毎日毎日、現場の掃除ばかりしていたそうで、当時は、なんでこんなことを思っていたそうですが、その経験が、後に役に立ったとのことでした。この言葉が、自分の仕事への考え方・取り組み方が変わるきっかけとなり、今でも、強く心に残っています。

現場監督の仕事は、肉体的にも精神的にも、かなり過酷なものだと思います。しかし、建物が完成したときの喜びは、何物にも代え難く、それまでの苦労がすべて報われるような気がします。そして、また、性懲りも無く、現場監督の仕事が続けてしまうのです。建築というものは、工場で大量生産されるものと違い、それぞれの建物で、その場所・その建物にあったつくり方をしなければなりません。いつの間にか、大学を卒業して十数年経ってしまいましたが、いまだに毎日が勉強です。

